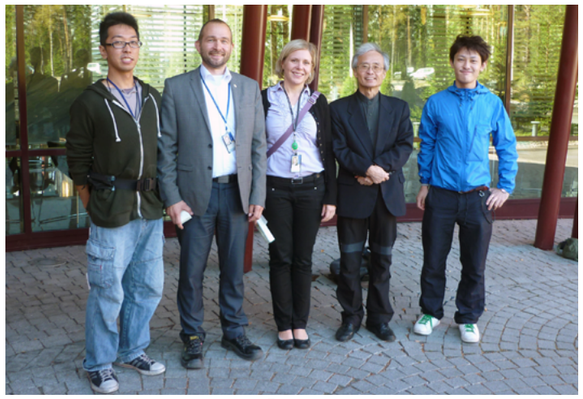
（1 ページからの続き）

閉鎖が伝えられる英国セラフィールド再処理工場を追った作品（林大樹）、中国の南京大虐殺ドキュメント（王思奇）などがある。

さて、Commencement には「卒業式」の他に「出発」の意味もある。70 歳。第三の Commencement は、2 年前、開局したネット放送局「映像作品『いのち』プロジェクト」（http://hayashieizousakuhinninochi-katuchan.blogspot.jp）を充実させること、2012 年に監督として完成させた映画『いのち』の続編を制作することである。

院生の皆さんへのメッセージは、「活字・映像を問わず世界に通用するジャーナリストとして活躍してほしい。10 年間が勝負どころ」というものだ。健闘を祈りたい。



▲2012 年、フィンランド「オンカロ」を訪れた林先生（右から 2 番目）、戸田政考さん（一番左）、林大樹さん（一番右）。写真提供：戸田さん

## 意外と仕事してますよ！報告

**MAJESTy2 期（'09 年修了）**
**孟芊芊**（もうせんぜん）

民間企業に就職して 4 年。最初は雑誌や映像などメディアっぽいことをしていましたが、最近はもっぱら日本企業の研究開発拠点の活性化に関わっています。新しい発想で商品やサービスを生み出す“イノベーション”を起こすにはどうしたらよいか。ということで、毎週若手社員から所長までさまざまな立場の人たちと飲んだくれています。

面白いことに、素晴らしい技術的バックグラインドを持ち、英語が話せる優秀な日本人は意外と多い。しかし、ビジョンを掲げ、周りの人々を巻き込みながらスピード感を持って決断できる人材が圧倒的に少ないのです。

今チャレンジしているのは、国内外のさまざまな技術領域や考え方を受け入れ、それを最大限に使いこなして新しい価値観を生み出す“文化”を研究所の中にどう根付かせるかという課題です。手探りではありますが、研究所の方々とディスカッションしながら海外とのネットワーク構築や人材採用・育成などの戦略プランを練り、実装とフィードバックを繰り返しながら進めているところです。

一見ジャーナリズムとはほど遠い感じがしますが、相手から話を引き出し社内の問題点を見つけたり、目的やビジョンを共有して多くの関係者を動かすという点で、MAJESTy で学んだことや経験がとても役に立っています。

ちなみに、今年からいよいよシンガポールでの活動が本格化。お越しの際はぜひお声がけください。一緒に飲みましょう！

## バラバラなのに一体感がある

**J-School5 期（'12 年入学）**
**阪口真平**

J-School が発足から 5 年が経ち、多様性に溢れた環境は、刺激的な毎日を届けてくれます。

研究や講義は、やはり楽ではありません。読了文献の量に圧倒されました。講義準備や課題、自分の研究など、大学受験よりも確実に机に向かっています。かつ、座学だけでなく、フィールドワークやインターンシップ、実務家の方と交流、セミナーへの参加と忙しいですが、J-School の先生方や仲間とともに充実した時間を送っています。

ほかにも、学生主体の勉強会やサークルが数多く走っています。私は、先輩の主催する政治思想・哲学勉強会に参加し、上下関係に臆することなく、議論をしています。時には、完膚なきまでに論破されたりしますが、そんな日の帰りは図書館行きです。

もちろん厳しさはありますが、みんな和気あいあいとして、アットホーム。研究はバラバラで、講義も異なるのに、一体感がある。「変な大学院臭がしない」というのが、一番の J-School の魅力です。

## 同窓会名簿をつくっています　同窓会事務局

事務局は、同窓会や現役学生の交流・発展を目的とした同窓会名簿づくりを進めています。会員（学生ご経験者）と特別会員（教職員・教職員ご経験者）のお名前、ご入学年、現在の所属と都道府県、メールアドレスを、同窓会員、特別会員、現役学生が閲覧できるものを予定。2013 年 4 月以降の運用開始を目指しています。詳しくはメールなどで連絡します。名簿登録へのご協力よろしくお願いします。





## ■山本美香先生を偲ぶ■
## 忘れられない追悼記事

**J-School2 期（'11 年修了）松村大行**

2012 年 8 月 21 日の早朝、私は J-School の同期で読売新聞記者の鎌田君、そして会社の編集長から「山本美香さん、シリアで死亡か」という報を受けました。朝刊の記事では情報が錯綜していましたが、事態がすっと頭に入ってきました。

生前、学生・社会人と異なる立場で山本さんに接しました。学生の頃は「戦争ジャーナリスト＝正義感を押しつける人」という私の先入観を、講義での理路整然とした語り口と飲み会での飾らない人柄で砕いてくれました。

2011 年 8 月には、子ども向けの著書『世の中への扉 戦争を取材する 子どもたちは何を体験したのか』（講談社）を出版された折に、朝日小学生新聞の記者として取材しました。「まだ 1 年目でしょ。立派だねえ」と声をかけてくれました。幼い頃の夢やジャーナリストになった経緯に加え、東日本大震災の被災地での取材話も伺いました。

こんな思い出をふり返りながら、翌日付の小学生新聞に原稿用紙 1 枚分ほどの記事を書きました。明るい声に強い違和感を覚えつつ、取材テープをくり返し聞きました。

「私はふつうの小学生でしたが戦争ジャーナリストになれました。みんなにも夢を持って、一歩ふみ出してほしい」。記事のこのコメントを埋めるまで、2 時間かかりました。一生忘れられない仕事になりそうです。

▲松村さんが書いた『朝日小学生新聞』2012 年 8 月 22 日付記事。記事画像提供：松村さん
▶山本先生と浅井晶子さん。写真提供：浅井さん

## 美香さんへ

**J-School4 期（'13 年修了予定）**
**浅井晶子**

美香さん、初めてあなたの名前を知ったのは、ジャーナリストを目指し始めた時でした。私の夢である国際報道は決して簡単ではありません。「女性で活躍している人はいるのだろうか・・・」。

調べてみると、美香さんの名前がすぐに出てきました。美香さんは世界中の弱い立場の人の声を伝えていましたね。「私も将来、こんな報道がしたい」。あなたはすぐに私の憧れの人になりました。

「私、美香さんのこと、大好きなんです！」と、美香さんの授業を初めて受けた後、私はすぐに告白してしまいましたね。「ありがとう」と、笑顔で言ってくれたのを覚えています。

その後も、忙しい中、私の授業の課題のために時間を割いてくれたり、私の個人的な相談にものってくれたり、本当に感謝の気持ちでいっぱいでした。進路のことで悩んでいる時に、お茶をしながら 3 時間も相談にのってくれましたね。本当に嬉しかったです。

そして、あの時の「またね」が、最後のお別れになってしまうとは、思ってもみませんでした。

私は、本当に美香さんのことが大好きでした。私にとって、いつまでも憧れの女性です。

今、私は記者として一歩を踏み出しています。どうか見守っていて下さい。

美香さんのご冥福をお祈りしています。

## ウェブ企業で営業職を経験中

**J-School1 期（'12 年修了）**

**丸山紀一朗**

私は現在、医療と介護の情報サービスを展開する株式会社キャリアブレインに務めています。昨年４月に入社し、名古屋支社にてウェブ広告の営業職に就き約１年が経過しました。

当社には、医療従事者の人材紹介会社、医療従事者求人のためのウェブ広告会社、医療介護のニュース配信会社など様々な顔があります。

私自身は J-School 時代の研究の過程で当社を知ったのが入社のきっかけでした。将来的にはウェブのジャーナリズムに携わりたいと考えているため、口八丁手八丁なところが大いに必要とされる営業職と、ニュースの現場を歩く記者職とをどちらも経験できる、ウェブの会社として魅力的でした。その思いは入社後の今も変わらず持ち続けています。

ただし、医療・介護という古い業界ゆえ、ウェブの会社とは言えあらゆる面でスピード感が遅く、新しい潮流に乗り遅れている部分があることは、本質的にはマスコミと同じです。この点は社内でも声を大にして主張していかなければと考えています。

まずは営業の現場で利益を生み出す方法を学び、近い将来に記者職も経験した上で、バランス感覚のある人間としてジャーナリズムと関わり続けていきたいです。

▲仕事中の丸山紀一朗さん。写真提供：丸山さん

**J-School2 期（'11 年修了）**

**伊東裕貴**

『よくわかる広告業界』（日本実業出版社）の最新版を昨年発刊したのでご一読いただけると幸いです。

**MAJESTy2 期（'09 年修了）**

今村雄一郎

地元に帰り２年、歯科医業は順調に軌道にのってきました。ブログ、HP をやってますが、MAJESTy で学んだことも多少なりとも役にたてているかと思います。若い方は結構みてくれていて、これを見て人となりを知り来院してくださる方もいます。期待に応えれるような診療をしていきたいと思います。今年は医院改装、自分らしいカラーをだし、地域医療に貢献していきたいと思います。患者数はおかげさまで倍増、これからも、さらに精進しがんばります。矯正インプラントなど診療の幅もひろがり自分でもこれからが楽しみです。

## ● 短信・近況 ●

**MAJESTy3 期（'10 年修了）**

**田村真紀夫**

多少なりとも科学技術関係の執筆・広報と教育に関わっております。やはり、科学技術リテラシーや危うい報道には危機感を感じます。

## ● 事務局より ●

### ご寄稿ありがとうございます

原稿と写真などをお寄せいただき、ありがとうございました。早稲田大学を定年退職される小林先生には、メディア論に対する現在の思いを、同じく林先生には、これからのご活動の予定をご執筆いただきました。相変わらぬご活躍とご指導を願ってやみません。

孟さん、丸山さんの原稿からは修了後のご活躍ぶりが伺えます。阪口さんには、現役生の立場から学びへの率直な思いを書いていただきました。

松村さんと浅井さんには亡くなられた山本美香先生への思いの丈を綴っていただきました。山本先生に謹んで哀悼の意を捧げます。

田村さん、伊東さん、今村さんも、近況をありがとうございました。

2013 年４月からも事務局のメンバーは引き続き下記のとおりとなります。事務局長：漆原次郎（MAJESTy 第１期修了）／事務局次長：宮田新作さん（同）、孟芊芊（もうせんぜん）さん（同第２期修了）、青山幹史（もとし）さん（J-School 第１期修了）、松村大行（ともゆき）さん（同第２期修了）／会計：中村理先生（准教授、ジャーナリズムコースプログラム・コーディネーター）。

## J-School・MAJESTy 同窓会会計報告

**同窓会事務局**

2012 年度（2012 年３月から１年分）の会計報告です。

収入の部
前年度繰越金 56,330 円
同窓会会費０円
合計 56,330 円

支出の部
2012 年３月同窓会　花束２つ
10,500 円
A3 用紙 500 枚（2012 年３月現役生に同窓会会報配布・印刷用）890 円
名札ホルダー 50 個　7,090 円
2013 年３月同窓会　花束２つ
10,500 円
総会打ち合わせ交通費　０円
合計　28,980 円

次年度繰越金 27,350 円




# J-School・MAJESTy 同窓会報

第５号　2013 年３月 20 日（水）　発行 J-School・MAJESTy 同窓会事務局


## リタイヤ目前に考えていること

**政治経済学術院教授 小林宏一**

結構、テレビは視る方なのですが、ごひいき番組のひとつに『秘密のケンミン SHOW』（日テレ：木曜９時）という番組があります。この番組は、食文化関連のものを中心として、他にもコミュニケーション・言語文化がらみで（特に、時々取り上げられる大阪のコミュニケーション文化特集は出色です）、他県（地域）のひとには意外と思える、あるいは理解しがたい事象を取り上げ、日頃、当たり前と思っている身の回りの文化が、結構ローカルなものであることを気づかせ、視る者に軽いショックを与える趣向になっています。別のことばで言えば、この番組は、日常文化の「ところ変われば、品変わる」性＝空間拘束性をネタにしたものということになるでしょう。

このような前フリのもとで考えてみたいのが、昨今における日常文化の時間拘束性ということになります。おそらく、ここ５年間ほどのインターネットの世界における大きな変化のひとつは、コンテンツ（内容）・ビジネスから、コミュニケーション・ビジネスへのシフトではないかと考えています。もちろん、コンテンツの領域も、依然として日々拡大していることは間違いないのですが、それにも増して、人間コミュニケーションを様々な様式のもとで「誘導」する類のビジネス、いいかえれば SNS サービスの伸張が顕著であり、こうした新しいサービスの登場の度毎に、私たちは、新たな「舞台」の上でのコミュニケーション演技をめまぐるしく変容させているかに見えます。

メディア技術が私たちのコミュニケーションの「様式」を変えるとの認識としては、テレビの登場と共に「映像の時代」の台頭と「文字の時代」の後退が語られたことが思い出されますが、その結論もでないうちに、昨今の SNS によってもたらされたコミュニケーション行動の「流行現象」をどう考えるべきか――メディア論は新たな挑戦を受けているかに思われます。

## Thank you & Happy “Commencement”

**政治学研究科ジャーナリズムコース非常勤講師 林勝彦**

「反骨」「群れない」「門のない大学」。大好きな早稲田大学とも３月でお別れ……。少々寂しい気もするが、まずは Happy Commencement を迎えられたことに、院生と教職員の皆さんに深く感謝いたします。

これまで、複数の大学で講義や演習を行ってきたが、ここが一番やり甲斐があり、実に楽しかった。もっとも、院生にとっては厳しい演習講師ナンバーワンと“悪評”高いことは十分に承知していたが、プロの世界ではこんなレベルではないことを知ってもらいたかったがためである。

高校卒業時、当然、早稲田大学に行くと強く主張するも、親父の業界学閥故どんでん返しに合う。成人後、第一の Commencement では、父の仕事は選ばず、テレビドキュメンタリーを制作したくてディレクターとして NHK に入局。以後、山口放送局を皮切りに、数百本の番組を制作する。

小生の代表作は、NHK スペシャル『驚異の小宇宙・人体』『人体Ⅱ 脳と心』『人体Ⅲ 遺伝子・DNA』全 20 本シリーズであるが、この源流は赴任地の山口にある。点としてみると山口市は山紫水明だが、山口県を面として見ると、宇部・徳山など公害に悩んでいた。テーマを掘り下げるため胎児性水俣病を取材したことがきっかけとなり、以来“いのち”の問題が生涯のテーマとなる。63 歳、NHK、NHK エンタープライズ 21 を定年で迎えた第二の Commencement。縁あって、映像関連の教師となる。2008 年から早稲田大学大学院の MAJESTy にひきつづき、ジャーナリズムコース「科学映像制作演習」を担当させていただいた。

印象に残る作品としては、世界初の二足歩行ロボットを完成させた故・加藤一郎教授のドキュメンタリー（中居広起ら）や、「新型インフルエンザの“毒性”パンデミックは起るか？」（上崎貴実代・渡邉一郎ら）などの他に、海外取材作品としては、中国・四川大地震の PTSD を追った作品（島田尚朗）、世界唯一の高レベル放射性廃棄物処分場であるフィンランド「オンカロ」のドキュメント（戸田政考）、

（2 ページに続く）